Georgica の独創性

——「農耕賛歌」の解釈をめぐって ——

山下太郎

序

Verg. は，しばしば Hesiod. 的と称される[1] Geo. について実際にはそれをどのような詩としてとらえているのであろうか.

Geo. に於いて，その独創性は 3 度にわたって表明されている (2.173-176, 3.40-42, 3.289-294). 例えば，2.173-176 では，Hesiod.への言及が見られ (176: Ascraeumque....carmen)，自ら，ローマの Hesiod.たらんとする強い決意が示されている (特に 175 ausus に注意されたい).

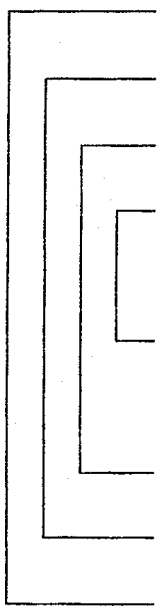
他方，これら 3 箇所における詩の独創性の表明は，いずれも，未踏の領域に挑戦する Lucr. の表現 (D.R.N. 1.926f.) を想起させる (特に 3.289-294).

一方，3.40-41: Dryadum siluas saltusque sequamur/intactos と言う表現は，この Lucr.の表現を示唆すると同時に Ecl. 的モチーフを示している点も見逃せない[2]. すなわち，これらの例から窺えることは，Geo. が Hesiod. と Lucr. に代表される教訓詩の伝統を継承するとともに，いわゆるローマ的な詩として Ecl. の牧歌的理念を発展的に吸収している可能性である.

ところで 2.176: Romana per oppida という表現は Geo. がなんらかのローマ的な要素を持つ事を示唆するが，この表現は特に直前の「イタリア賛歌」[3]の内容と響きあい，Verg.が偉大なローマにふさわしい偉大な詩として Geo. の独創性を誇っている事を示す. この自負のモチーフは第 3 巻の序歌に於いても認められる[4]. ここで Verg. は Geo. の独創性を表明すると共に，将来 Aug.を称える叙事詩を書くことを約束し[5]それによって自ら勝

利者として天を目指すと言う（3.8-9）．また，第４巻のいわゆるスプラギス（4.559-566）における Verg. と Aug. の対置も，この独創性の自負のモチーフと響き合うと考えられる[6]．すなわち，第３巻の序歌と 4.559-566 に於いては，常に，ローマの primus を目指してきた詩人のいわば自己成長の自覚が強く示されていると言えるだろう．

さて Geo.に於いて Verg. が詩や詩観に触れた箇所は今まで確認してきた箇所を含めると全体で８箇所あり，それらは次に図示するような構成を示す．



a. Geo. の開始が告げられる．（1.5）

b. Geo. を航海に例える．（2.39-46）

c. Geo. の独創性が表明される．（2.173-176）

d. Verg. と Lucr.の自然観，幸福観が対置される．（2.475-494）

e. 将来の叙事詩が約束されるとともに，Geo. の独創性が表明される．（3.8-45）

f. Geo. の独創性が表明される．（3.284-294）

g. Geo. を航海に例える．（4.116-117）

h. Geo. の完成が告げられるとともに，かつて Ecl. を歌った事が示される．（4.565-566）

ここで，ａとｈ，ｂとｇ，ｃとｆの各々について，その対応を認めるならば，ｄとｅを一体ととらえる事によって，これら全体が，いわゆるリング構成を持つと考えられる．この構成の特色をふまえ，本稿で特に着目したい箇所としては第２巻のエピローグ（いわゆる「農耕賛歌」458-540）が挙げられる．従来，Geo.における「農耕賛歌」の意義については様々な角度から論じられてきたが，今回，私は，詩人の独創性の自覚との関連でこの箇所を検討してみたいと思うのである．このとき，私の注目したい問題は具体的に次の２点に絞られる．

① 「農耕賛歌」では，農耕賛美のテーマの間に，Verg. と Lucr. の自然観及び幸福観の対置が一見唐突に挿入されているが[7]（2.475-494），この対置の意義は何か.

② ① に注目するとき，「農耕賛歌」は全体とどのように関わると考えられるか. 例えば，2.475-494 で示される Verg. の控え目な立場（2.486 ingloriosus に注意されたい）は，第3巻序歌で，勝利者として自ら天を目指すという詩人の立場（3.8-9）と対照的であるが，このコントラストの持つ意味は何か.

私はこの問題を考える手掛かりとして 2.485-489，493-494 で表現される Verg. の自然観と幸福観が Ecl. の詩人としての立場を表すことに注目する. 例えば 2.485-489 では Verg. の自然美を愛する心が語られているが，ここでは川，谷，森，木陰等，いわゆる牧歌のキーワードが列挙されている. また 2.493-494 に於いては田園の神々すなわちパーンや老いたるシルウァヌス，ニンフの姉妹を知る点で自分は幸せであるという. 一方「農耕賛歌」の他の箇所に於いては理想化された農夫の生活が描かれているのだが，私はこの描写を通じて Verg.が Geo.の詩人としての理想を表明していると考える. それは以下に於いて明かにされるように Hesiod. と Lucr. の作品，及び Ecl.のテーマやモチーフをローマの詩人として独創的に発展させたものである. さらに続く第3巻の序歌で，Verg. は Geo. の独創性を表明し，未来の叙事詩を約束する[8]. ここに於いて，もし我々が「農耕賛歌」と第3巻の序歌を一体ととらえるとき（この可能性は先に示した構成の特色が示唆している），この箇所は全体として 4.559-566 と対応しつつ，常に新たな詩の領域に挑戦してきた詩人のスプラギスを意味すると解せよう[9]. 従って，以下に於いて今示した解釈の可能性を検討し，併せて Verg. 自身が Geo.をどのような詩として自負していたのか，その独創性の自覚の根拠を具体的に探っていきたいと思う.

1

初めに触れたように「農耕賛歌」に於いては自然哲学者（以下 Lucr.と解す）と Verg. の自然観と幸福観が対置されているが（2.475-494），その意義は何であろうか．この問題を考えるため，まず「農耕賛歌」では「幸福」を表す３つの言葉が見出せる事実に注目してみたい．2.475-494 に於いて，万物の原因を理解し全ての恐怖（特に死の恐怖）を克服した者は幸せである（felix）と言われる．一方，田園の神を知る者も幸福である（fortunatus）と言われる（2.490-492）．2.475-489 における Verg. と Lucr. の自然観の対比をふまえ，前者（felix）が Lucr. の幸福観を表し，後者（fortunatus）が Verg.のそれを表すことは明白である．ところで 2.485-489, 2.493-494 に認められる牧歌的モチーフからこの Verg. の立場が Ecl. の牧人の理想を代弁していることについては先に述べた．他方，「農耕賛歌」の冒頭で，農夫は「余りにも幸福な」（2.458 fortunatos nimium）と形容され，2.493: fortunatus との表現上の対応が見られる．ここで 2.493: fortunatus et ille deos qui nouit agrestis という表現について見ると，ille は文脈上 Ecl.の牧人の立場を代弁する Verg. を意味すると解されるが，表現の上では続く 495: illum や 498: ille とともに，都市生活者（富や名声を求めて争う者）と対置される農夫を示していることも明かである．つまり Geo.の農夫は田園世界の平和（secura quies や otia と表される）を楽しみ（2.467-471），敬神の心を持つ（2.473 sacra deum）と言われる点に於いては，Ecl. の牧人と同一の立場に立つと見なせよう．

ではこのような関係の中で，Lucr. への言及の意図はどのように理解出来るだろうか[10]．今見た農夫と牧人に共通する心の在り方に Verg.の幸福観の一端を認めるならば，それは Lucr.の見解と共通する要素と相反する要素を併せ持つことに気付く．まず両者の共通点については，共に「心の平静」を理想化する点に求められよう．すなわち，2.467: secura quies や 486: otia の示す農夫の心の安らぎや 2.472: exiguoque adsueta iuuentus の示

す知足の心，さらに貧富の差を知らない心（2.498-499）はエピクロス的アタラクシアを想起させる．また「農耕賛歌」に於いては争いから遠く離れた（2.459: procul discordibus armis）農夫の生活が，争いに満ちた都市生活者のそれと対比的に描かれているが，この構成自体，D.R.N. 第2巻の序歌の影響を受けていることが考えられる[11]．すなわち Lucr.も，争いから離れて田園の安らぎを解する喜び（D.R.N. 2.29-33[12]）を富や名声を求める者の争いと対比して表している．

一方両者の相違点は何か．例えば Ecl. の牧人も Geo. の農夫も神を敬う心を持つ点で，「田園の神々を知る者」（2.493: ille deos qui nouit agrestis）と見なしうるが，Lucr. はその様な形の敬神を鋭く批判する者である．Geo. 2.490-492 ではエピクロス哲学の立場から心の恐怖を追放できた喜びが語られるが，これは神が自然界には介入しないことを証明することによって得られる境地である．確かに Lucr. は田園の安らぎを称えはするものの，田園に神の介入を認める者ではない[13]．しかしここで注意すべき点は，実際に Geo. を読むとき Verg. は自然法則を理解する必要性（例えば 1.50-53）と神に祈りを捧げて仕事を進める必要性（例えば 1.338: in primis uenerare deos[14]）を共に強調している点である．ではこれらの一見矛盾する自然観は Geo. に於いていかに結び付くのだろうか．

まず Geo. の「敬神」を Ecl. のそれと比較しておきたい．Geo. の農夫は Ecl. の牧人と同様に自然を愛し神を敬うけれども，この神は単に田園の神を指すばかりではなく広く農耕を守り発展させる神としてとらえられている．例えば第1巻の序歌では農耕を助ける 12 の神々が呼ばれている（1.5-23）．具体的に言えば，作物を育む大地の力や，農夫にとっての恵みの雨は人間が作り出すものではなく神の力の現れと考えられる（1.21-23）．この意味で農耕は農夫と神の共同作業を意味するだろう．それゆえ，農夫は収穫を通じて神への深い感謝を知るに違いない．

ではこの様な「敬神の心」を持つ農夫にとって，いわゆる Lucr.的な自然観はどのように関わるのだろうか．Verg. は第1巻の序歌に続く箇所で，ac

prius ignotum ferro quam scindimus aequor, / uentos et uarium caeli praediscere morem / cura sit ac patrios cultusque habitusque locorum, / et quid quaeque ferat regio et quid quaeque recuset (1.50-53) と言う．すなわち安定した収穫を目指すためには一見計り知れない自然現象の中にも何らかの法則性を見出さなければならない．また続く 54-59 に於いて土地の多様な特性に触れた後，continuo has leges aeternaque foedera certis / imposuit natura locis, quo tempore primum / Deucalion uacuum lapides iactauit in oruem, / unde homines nati, durum genus.... (1.60-63) と言う．この 50-61 に Lucr. 的自然観が反映することは表現の上からも明白である（例えば 60: foedera, 61: natura, 63: durum genus）．しかし自然法則を理解することの意義は Verg. と Lucr. に於いて著しい相違を示す．すなわちLucr. にとって自然法則の正しさは神の地上への介入を否定する有力な根拠であるのに対し，Verg. によればそれはむしろ神意を証明するものに他ならない．

例えば Geo. に於いて嵐はユピテルの意志を反映するものとされる（1.328-329）．ここで注意すべきことは，ユピテルは人間が嵐などを確かな合図（signum）から予知できるように定めたと言われる点である（1.351-355: Atque haec ut certis possemus discere signis, / aestusque pluuiaque et agentis frigora uentos, / ipse pater strauit quid menstrua luna moneret, / quo signo caderent Austri, quid saepe uidentes / aglicolae propius stabulis armenta tenerent.）．つまりこの signum を読む作業は天候の予測を目的とする点であくまでも客観的な自然理解を意味するが，それは同時に神のメッセージを読むことを意味していたのである[15]．農夫は正しく自然法則を学ぶことで自然の災害を未然に回避したり，自然に内在する様々な可能性を収穫の為に生かすことが可能となる．しかしその結果として農夫がいかに大量の収穫を得ようとも神の配慮への深い感謝と知足の心が無いならば決して「幸福な」とは言われまい．すなわち Verg. はこのような独自の労働観を通じて Lucr. の説く自然の客観的理解や知足の心と

Ecl.で示される敬神の心や自然愛等のモチーフを矛盾することなく結び付けていることが窺える．ところでこの Geo. の労働観については Hesiod. の Erga との比較に於いてさらに検討を続ける必要があるだろう．

2

第１巻のエピローグでローマの内乱が語られているが，内乱では神の意志に適うこと（fas）と適わないこと（nefas）が逆転し様々な悪がはびこるとともに農耕が顧みられないことが示されている（1.505-508）．ここで示唆される fas としての農耕と nefas としての争いの対比が「農耕賛歌」に於いては具体的な記述を伴って展開する．すなわち労働に応じて十分な生活の糧を生み出す大地は「最も公正な大地」と呼ばれているが，この公正さは偽りを知らない農夫の生活（2.467: nescia fallere uita）を特徴づける．また正義の女神の足跡は農夫の上に印されたとも言われる（2.473-474）．一方 様々な悪を重ねる都市生活者の記述は nefas の具体的描写を意味する．この fas と nefas の対比は基本的に Erga のテーマを反映すると考えられる．

Hesiod. によれば 現実は苦難や争いに満ちた不正の時代であるが（Erga 174ff.）人は労働に励むことにこそ幸福の希望を見出せる（286ff.）．いわゆる「正義の都市」の記述は Hesiod. の希望する理想社会を表し「鉄の時代」の記述は不正な現実を描写したものと考えられる[16]．このとき「農耕賛歌」に於ける農耕社会の描写は Erga に於ける「正義の都市」を想起させる一方，都市生活者批判の表現は「鉄の時代」の記述を思わせる[17]．実際 2.458-474 に見られる「正義」（2.460: iustissima, 467: nescia fallere uita, 474: Iustitia）と「労働」（472: patiens operum）と「幸福」（458: fortunatos）の結び付きに Hesiod. の思想の反映を認めることが出来るだろう．しかしながら Verg. はこのような Erga のテーマを Geo. に取り入れるにあたって何らかの改変を行っていることが予想される．以下に

於いて両者の労働観の相違を検討してみたい.

Hesiod. によるとゼウスは知に優れたプロメテウスの欺きに立腹し様々な災いを人間世界に与えたとされる (Erga 42-58). 悲惨な現実はゼウスがもたらした罰であり人間はその意志に従う方向に希望を見出さなければならない. それはゼウスの正義を信じ正しく労働に励むことを意味するであろう. 一方 Verg. 自身労働の必要性をユピテルの意志との関連で述べている (1. 118-159). すなわち現実の農耕の困難はユピテルの意図した事と見なされる (1.121-122: pater ipse colendi / haud facilem esse uiam uoluit,). しかしこの困難はユピテルが人間に与えた罰ではなくむしろユピテルの好意が人間に与えた試練として示される点に Erga との相違が見出せよう. すなわち 1.123-124: curis acuens mortalia corda / nec torpere graui passus sua regna ueterno が示すように, ユピテルが黄金時代を終結させた理由はその様な安楽な時代がかえって人間の精神を鈍くすると考えたからであろう. 事実人間が工夫を凝らしその経験が様々な技術を産む様に (1.133: ut uarias usus meditando extunderet artes) ユピテルは現実に害や困難を与えたことが示されている (1.129-135). 一方 1.136-146 ではこのユピテルの期待に応える形で困窮に駆り立てられた人間の労働が現実の諸困難に打ち克つ過程が具体的に描かれる (1.145-146: labor omnia uincit / improbus). すなわち 1.129-146 に於いては 1.118-128 からの テーマの拡大が見られ, いわゆる文明の発展とそれを促す人間の労働がユピテルの意志に適うこととして肯定的に描かれるのである (このとき問題になる 1.146: improbus の意味については後で触れる).

このようにユピテルの意志としての文明の発展とそれを促す人間の知性の働き (cf. 1.133: meditando) を肯定するところに Geo. の独自の視点が認められる. 例えば 1.135 に於いては文明化の象徴としての火の発見が言及され プロメテウスの火盗みのエピソードを想起させる. しかし 1.133: ut が明示するように それはユピテルが人間に期待したことと見なされ, Erga の視点との相違が意図的に示されるのである. ところでこの Geo. 独自の視

点については 2.475-494 で対置される2つの自然観（① 自然に神の介在を認める視点と，② 自然の法則を重視する視点） との関連で検討することが出来るように思われる． すなわち，① の視点に立って，文明の発展をユピテルの意志と解するとき，例えば農耕の発展を見守る神々の援助の意義が改めて理解されるだろう．また先に触れた Geo. における ② の視点の重視は今確認された知性の働きを肯定する視点との関連で理解されよう．以下この可能性を具体的に検討していく．

まず文明の発展に協力する神の助力の モチーフは 1.147-149 に認められることに気付く． cum iam glandes atque arbuta sacrae / deficerent siluae et uictum Dodona negaret (1.148-149) という表現に於いて「不安によって人間の精神を鋭くする」 ユピテルの意思が見出せるが， このとき prima Ceres ferro mortalis uertere terrram / instituit (1.147-148) とも言われている．このケレスの好意がもし人間に新しく食べ物を授ける形で現れるなら，それはユピテルの意志と対立するものであっただろう．しかしケレスは人間が自らの手で大地を耕すことによって食べ物を手に入れる方法を教えたのである．すなわちケレスは人間の不断の労働をむしろ促す点に於いてユピテルの意志に背くことはない．（一方ここで想起されるプロメテウスの人間に対する好意[18]はゼウスの意志と対立する点でケレスのそれと大きく異なる．）

ところでこの神の助力のモチーフは先に触れたように第1巻の序歌に於いて明瞭に見出せるものである．ここでは神の人間への好意や配慮を表す表現として alma (7)，munere (7)，praesentia numina (10)，munera (12)，curae (17)，fauens (18) 等が見られる． ここで注意したいことは，これらの神々は単に自然現象の中に働く力（例えば 5-6: 四季の循環，22: 作物を育てる力，23: 降雨 等）と関連付けられるだけでなく， 人間にとって有益な 発明や発見をもたらす 神 として 示される点である[19] (cf. 18-19: oleaeque Minerua / inuentrix, uncique puer monstrator aratri,)． この意味を具体的に考えるため再びケレスの例を取り上げよう．1.7-8 ではケ

レスの助力によって大地はしいの実を豊かな穀物の穂に変えたことが示される[20]．このとき Chaoniam....glandem (8) は glandes (1.147) と対応しながら 7-8 を 1.147-149 のエピソードと関連付ける[21]．すなわち 1.147-148: prima Ceres ferro mortalis uertere terram / instituit の示すごとくケレスの好意は豊かな実りを一方的に授ける形で現れるのではなくむしろ人間の知性による新しい技術の発展や発明を促す形をとる．先に見たようにユピテルはこのような人間の創造的知性を磨くために厳しい現実を与えたと解される．しかし人間の創意や工夫の努力が必ず新しい創造につながるという保証はない．ちょうど詩人にとってのインスピレーションがそうであるように Verg.は新しい発見や発明をもたらす人間の独創的精神といえども神的助力を待たなければならないことをこのケレスの例を通じて示唆しているように思われる．

ところで今確認された 発見発明のモチーフに対応する形で Geo. では ① 過去から伝わる教え (ueterum praecepta) を尊重する立場[22] (1.176-177) とともに ② 新しい発見や発明を称える立場を表している．例えば第４巻エピローグの「アリスタエウス物語」におけるミツバチの再生方法発見のテーマはこの２つの立場を重視する姿勢を表すものと考えられる[23]．人間の労働はそれが単なる肉体労働を指すならば文明の「発展」を保証しないだろう．Verg. はその条件として，先に挙げた神の助力に加えて ① 新しい世代が過去の文明の成果を正しく学び応用すること，及び ② 次の世代に対しそこに新しい発見や発明を加えて正確に伝えること の２点を示唆している． このとき自然の客観的理解が Geo. に於いて重視される理由の一つがここに見出せるだろう．すなわち過去から現在そして未来へと学び伝えられていく教え (ueterum praecepta) は普遍的知識として世代や空間を越えて継承され発展することが期待されるが，このときその知識を導くところの自然理解は当然客観性を持たねばならない事になる． ここで注目されることは Lucr. 自身文明の発展を描く中で (D.R.N. 5.925-1457) その要因として人間の知性の支配を受けた経験 (D.R.N. 5.1452: usus et impigrae simul experien-

tia mentis）を挙げていることである．この表現は Geo. 1.133: ut uarias usus meditando extunderet artis と対応する．このように知性の働き（D.R.N. 5.1455: ratioque）を文明発展の要因の一つと見なす Lucr. の見解は今見た Geo. の文明観に少なからぬ影響を与えていると考えられる．しかしながら，Verg. は文明の発展をユピテルの意志やそれに従う他の神々の助力との関連でとらえるところに，Lucr. の文明観との大きな相異が見られるだろう． 一方，Lucr. にとって ratio は，本来文明の発展ではなく，各人の心の平静を実現する目的のもとで役立てられるべきものであった[24]．とまれ，Verg. はこのような形で知性の働きを積極的に評価している（手放しにでないことは後で触れる）点で，Hesiod. との大きな相違が認められるだろう．

ここで以上の考察をまとめると，Erga に於いては，a）「文明の発展」と結び付くプロメテウスの b）「知性の働き」（即ち，プロメテウスの火盗み）に対する c）「ゼウスの怒り」が，人間に d）「厳しい現実」を与え，その e）「労働」を促す，という解釈が示されていたことになる[25]．他方 Geo. に於いては， c'）「ユピテルの好意」としての d'）「厳しい現実」に於いて，人間の b'）「知性の働き」に基づく e'）「労働」が a'）「文明の発展」を促してきた，と示される．このとき，d'） を c'） と解する視点は，Geo. の「敬神」の思想と関連し， b'），e'），a'） の結び付きは，Lucr. の文明観と深く関連していることが明かとなったわけである．

しかしながら，Verg. にとって，人間の課題とは単に文明を継承し，発展させることだけを意味するのであろうか．あるいはこのとき人間の幸福がどこに求められるのかが問題となろう．Verg. は「農耕賛歌」に於いて，Geo. 独自の幸福観を示唆していたのである．それはエピクロス的「心の平静」や，Ecl. に於いて求められた自然愛や敬神の心，さらには Hesiod. 的正義の思想等を反映したものと考えられる．従って以下に於いて Geo. の幸福観を，今見た文明論との関連の中で再検討してみたいと思う．このとき「農耕賛歌」に見出せる Lucr. の文明観と幸福観の影響に注目してみる必要があるだろう．

3

先に触れたように，Geo.における文明の発展のテーマは，Lucr.の文明観（D.R.N. 5.206f.，1361）の影響を受けている．しかし，Lucr.は文明の発展を必ずしも肯定的に描いてはいない．それはむしろ人間の欲望をかき立て，争いや戦争を引き起こす要因となりうることが示されている（D.R.N. 5.1418）．例えば，人間の所有欲や権力欲は，いつの時代に於いても存在するものであって，かつては動物の毛皮が，そして今は黄金や緋の衣が，人を争いに駆りたてる（D.R.N. 5.1423-1424）．しかしながら，Lucr.によれば，賢者はいつの世も文明に依存しない生活を送るのである．なぜならエピクロスが説くように，わずかな物に満足を知る者は，田園世界に身を置き，友と語らうだけで十分であるからだ（cf. D.R.N. 2.20-33）．そしてこの種の喜びは，原始生活に於いても認められるものであった（D.R.N. 5.1392-1396）．即ち Lucr.にとって真実の喜びは文明の発展とは無縁のものと見なされている．

では，Geo.の農夫の幸福と文明の関わりはどう示されるのか．「農耕賛歌」では質素を旨とする農夫がエピクロス的道徳を実践する者として描かれ，富と名声を求めて様々な悪を重ねる者と対比されていた．また農夫は現実のローマの政治的情勢とは無関係であり貧富の区別の何たるかを知らないことが示される（2.498-499）．これらの記述が今見た Lucr.の幸福観を反映することは明らかである[26]．しかし「農耕賛歌」に於いて農夫の労働は家族や祖国を支えることが示される（2.514-515）．また 2.532-540 では農夫の生活が過去のサトゥルヌスの生活に匹敵するとともにローマの歴史を通じてその発展を支えてきたと言われている[27]．このローマの発展の言及は第２巻の「イタリア賛歌」を想起させるものである．Verg.にとってローマの発展とは文明の発展と同義であるとするならば[28]，Verg.の描く農夫は文明の発展に貢献しながらもその成果に依存しない生活を送る者と見なしうる．一方富と名声を求める都市生活者の争いは第１巻エピローグで描かれるローマ

の内乱を導く要因と見なせるだろう[29]．すなわち「農耕賛歌」に於いては文明の発展に対して「建設的な」農夫と「破壊的な」都市生活者という対比が認められる．一方 Lucr.の教えに従うものは文明の発展に対し「建設的」でも「破壊的」でもない．この者は文明化に積極的に「関与しない」者でありその成果に「依存しない」者と言える．

この比較を具体的に考えるとき 農夫の立場を特徴づける要素として 再び「労働」（labor）を挙げることが出来る． 1.118f．で示されたように農夫は現実の諸困難を labor によって克服する． この行為を駆り立てるものはより善い生を望む農夫の欲望と考えられ， 事実農夫は 「貪欲な」 （1.47: auari）とも形容されている．農夫はまた立派な畑を持つ名誉（1.168: gloria）や家畜の世話を通じての名声（3.288: laudem）を求めることが出来る．一方都市生活者も貪欲であり名声を求めて行動する，しかし農夫の誉れは不正を犯して求める名声とは本質的に異なるのである．農夫は自己の欲望を建設的な労働に結び付け収穫を生むが，都市生活者は欲望を暴力や不正な行いに結び付け争いを生むのである．先に見たようにユピテルは様々な「不安」（1.123: curis）によって人間の精神を鍛えることを欲した．人間がこのユピテルの意志に適うように生きるためにはこの「不安」から何らかの建設的行為すなわち labor を生まねばならない． 他方，都市生活者は「不安」から破壊的行為しか生まない点で nefas と結び付く．すなわち Verg. は fas としての「労働」につながる「欲望」や「不安」と nefas としての「暴力」に結び付く「欲望」や「不安」とを明確に区別し，前者を肯定し後者を批判するのである．ところでこの fas としての「労働」と nefas としての「暴力」の対比に Hesiod.の思想の反映を認めることが出来るだろう．事実この対比との関連で区別される２種類の「欲望」と「不安」は Erga の「２種類のエリス」 のエピソードを想起させよう． すなわち質素を旨とする農夫は「心の平静」を楽しみエピクロス的徳を実践する者であるが，神を敬い（2.473, 527-531）勤勉に労働する（2.472, 513-516），と示される点に於いては Lucr.の立場と区別され，むしろ Hesiod.の説く「正しい」生を実践する

者と見なせるのである．一方 Lucr. にとって，あくせく働くことは何であれ「心の平静」を乱すことであったかも知れない．この詩人によれば，現実の農業の困難は大地の退化現象が原因であるが，農夫はそれを知らずにいたずらに過去の大地の豊かさをうらやみ現実を嘆いていると言われる（D.R.N. 2.1157-1174）．Lucr.は農夫の労働（D.R.N. 2.1160: labore, 1163: laborem, 1165: magnos labores）も 富や名声を求めて 日夜あくせくする行為（D.R.N. 2.2: magnum laborem, 2.12: praestante labore）も 共に labor と表現し批判している（Lucr. は無論必要以上の「労働」を批判しているのであり人間の労働すべてを否定する者では無いであろう）．

ところでこの Hesiod. と Lucr. の思想の対比は表現上意図的に示されていることがわかる．すなわち農夫は secura quies（2.467）を楽しむ一方，nec requies（2.516）が示すように，彼の生活には休息がないことが言われている．この一見矛盾した表現の対比に於いて，前者はエピクロス的幸福観を反映し，後者は Hesiod. 的労働観を反映することが明らかである．つまり「農耕賛歌」に於いて Verg. は Hesiod. 的教えを実践しつつエピクロス的幸福（アタラクシア）を得る農夫を称えていると考えられる．このように「農耕賛歌」における農夫の生活はあらゆる点に於いて理想化されている事が窺えるが[30]，この農耕生活の記述は単に農業を行う者の幸福を表すというよりむしろ広くローマに生きる人間にとっての「模範」を表したものと解するべきかもしれない．またこのような美徳に満ちた農夫の生活が文明国家ローマの発展と結び付けられる点に，Geo.独自の視点があると言えるだろう．

4

しかし Geo. の思想はより複雑である．例えば 1.118-159 の記述に於いて ユピテルの試練に打ち克つところの「労働」は今までの我々の解釈では「正しい」行為のはずであるが，1.146 に於いて improbus と形容されている．また 1.139-140 や 1.155-159 は自然の側から見た人間の「労働」の

「邪悪な」側面を表しているとも受け取れる[31]．一方「農耕賛歌」に於いて人間の労働に正当に応答し生活の糧を惜しみなく与えるものとして示された自然（cf. 2.460: fundit humo facilem uictum iustissima tellus）は 1.118-121 に於いて「邪悪な」ものとして描かれている．例えば大地を耕す人間の側から見ればその労働を妨害するガチョウは improbus（1.119）と形容され 1.146: improbus と対応する．また umbra nocet（1.121）は falce premes umbras（1.140）と対応しながら自然と人間の「邪悪な」関係を表している．しかしこの umbra は「農耕賛歌」では牧歌的自然の安らぎを象徴するキーワードとして用いられていたのである（2.489）．

これらの例から窺えるように，Geo.は単に農耕を称え勤勉を説いた詩でもなければ理想化された農夫の姿を通じて道徳上の善悪を教える詩でもない．人間は単純に善と悪に二極化できるものでは決してなく，むしろ生きる限り自然に対して「邪悪な」存在とならざるを得ない点では皆同様である．人は自然と調和した生を希求しながらもユピテルの定めた「邪悪な」自然に対しては「邪悪な」労働をもって働きかけなければ，自らの生も文明も保持できないように宿命づけられた点にその悲劇的状況が認められるだろう．この人間の立場を表す比喩として 1.118-159 の記述に続く「小船の比喩」（1.199-203）を理解することができる．ここでは 1.118-159 のテーマを受けユピテルの定めた現実の厳しさの中で生きてゆく人間の状況が，ちょうど小船で上流に向かう者が一瞬たりともかいをこぐ手を休められない状況に例えられている．

このように Geo. では現実の厳しさを厳しさとしてとらえる視点が認められる一方，「農耕賛歌」に於いては理想化された農耕生活の描写を通じて自然と人間の完全な調和を賛美する視点が認められるのである[32]．ではこれら２つの視点は互いに矛盾すると考えるべきなのであろうか．私はこの問題を考察する上でいわゆる黄金時代のテーマに注目してみたい．すなわち 1.118-159 はユピテルの治める現実がもはや黄金時代ではない（1.125-128）ことを示す一方「イタリア賛歌」（2.136-176）では文明国家の理想として

のローマの繁栄が賛美される．また「農耕賛歌」に於いては農夫の生活が過去のサトゥルヌスの生活と結び付けられ，それが「イタリア賛歌」で称えられるようなローマの発展を支えてきたことが示されている（2.532-540）．ところでここに見出しうる黄金時代の再現というテーマは Ecl. や Aen. に於いて共に見られるものである．Ecl. の第４歌ではこのテーマが全体の主要テーマとして展開する中で サトゥルヌス の王国の再来が予言されている（Ecl.4.6）．一方，Aen. 6.792-794 ではアウグストゥスがかつてはサトゥルヌスの治めたラティウムの地に黄金時代を再びもたらすだろうと言われている．しかし Geo. の場合イタリアの誉（2.138: laudibus Italiae）の具体例が列挙され（2.140-172）サトゥルヌスの大地（2.173: Saturunia tellus）が称えられるものの（2.173-176）黄金時代の再現に関しては単に aureus hanc uitam in terris Saturnus agebat（2.538）と言われるに過ぎないのである．そして一方では鉄の時代にも等しい現実が描かれる（例えば 1.118-159，第１巻エピローグ の内乱の描写，「農耕賛歌」における都市生活者の描写に於いて）．

もしこの問題を合理的に考えるなら 1.118-159 が示すように，ユピテルは黄金時代が人間にとって害をなすと考えて現実に害悪を与えたのであるから，ユピテルが統治する限り，そしてユピテルの意志が変らぬ限り，黄金時代の再現はありえないはずである．しかし今見た黄金時代の再現に関する Geo.の一見曖昧な態度は，人間と自然の関係について示された２つの可能性――「邪悪」と見るか「調和」と見るか ――の提示とともに「農耕賛歌」に込められた Verg.の真意をつかみがたいものにしている．例えば「農耕賛歌」における fundit humo facilem uictum iustissima tellus（2.460）や ipsa uolentia rura / sponte tulere sua, carpsit（2.500-501）に見られる黄金時代モチーフは，pater ipse colendi / haud facilem esse uiam uoluit（1.122-122）に見られる認識と矛盾することが考えられる．しかしこれを矛盾として受取る限り「農耕賛歌」の持つ意義を積極的に評価する事は困難であろう[33]．私はこの問題を解く鍵として 2.475-494 に見られる

2つの自然観の対置に再び注目して見たいのである．すなわち Geo. に於いて等しく重視されてきた「敬神の心」と「客観的自然観」の2つの視点に立ってこの問題を考えるとどうなるであろうか．

例えば 1.118-159 に窺えるように人間の「労働」とは自然と調和した生（すなわち黄金時代的生）を求めて自然の「邪悪な」要素を取除く努力を意味するだろう．このとき人間が自然の法則性を理解できる程度に応じてその自然支配は可能になると言える．もし人間が自然のメカニズムを完全に知ることが出来たら人は神の如くに自然を支配することが可能になるであろう．このときこそ真の黄金時代の到来と言うべきである．しかし Lucr.とは違って Verg. は 自然の知的理解の限界を十分承知していたと思われる（cf. 2. 483-484）．Verg.にとって自然はどこまでも人知による理解を拒み人に「不安」を与える「邪悪な」存在として認識されている（例えば「ノリクムの疫病」に於いて）．もし我々が客観的自然観の立場から現実を眺めるとき「邪悪な」自然はあくまでも「邪悪な」ものであり「農耕賛歌」における黄金時代モチーフは矛盾として受け取る他は無いであろう．

しかし Verg.はこのような現実にユピテルの好意の反映を認めるのである．この認識はあくまで Verg.の「敬神の心」に基づく主観的判断と言える．このとき「安楽な」黄金時代が「邪悪な」要素を持ち，逆に「不安」を与える現実の「邪悪さ」が人間精神を鍛える試練として肯定される．事実，現実の抵抗感があるために人間は苦しみとともに生きがいを知ることになるのだろう．このように，Geo. の「敬神の心」は，自然の「邪悪さ」や心の「不安」といった否定すべき要素をむしろ進んで受け入れる視点を与えるのである．また，ここに示唆される真の幸福の在り方は，勤労のモチーフ(34)を媒介として「農耕賛歌」で「幸福な」と形容される農夫の幸福の在り方と矛盾することなく結び付くことがわかる．

一方，「農耕賛歌」における黄金時代モチーフについても同様に Geo. の「敬神の心」との関連で理解することができる．既に指摘したように，農夫にとって収穫は一年の労働の成果であると同時に，農耕を助ける神の力の具

体的な現れとみなせるだろう．従って農夫はその量の多少に関らず，神への感謝と深い充足感をもって自らの収穫を眺めるに違いない．この時，この収穫が黄金時代モチーフを伴って表現されても何の不思議もないはずである．また，secura quies（2.467）や otia（2.468）についても，単なる田園世界の物理的静寂を表すという以上に，このような農夫の知足と敬神の心を反映しながら，農耕生活の黄金時代的特徴を象徴する表現と言える．即ち，知性が客観的にとらえる現実に於いて，黄金時代の再現はありえないのに対し，「神を知る」農夫の心の目で見た世界に於いて，黄金時代の再現はありうることとして示されるのである．これまでの解釈から，これら２つの視点は互いに矛盾することなく統一的にとらえられるであろう．即ち，人は厳しい現実をユピテルの授けた試練と受けとめ，創意を凝らした労働によってその試練に打ち克つとき，生の充足を知るであろう．そしてこの幸福感が，自らに課題を与え，その労働や創造的精神を助ける神の恵みの一つに他ならないことを知るとき，その者の心の目には，あるいは黄金時代の再現が可能なものとして映るかもしれない．

5

以上見てきたように，2.475-494 で対置された２つの自然観は，Geo.の思想を解する上で極めて重要な意義を持つことが明らかとなった．また「農耕賛歌」は，1.118-159 と密接に関連しながら Geo.の詩人としての Verg. の理想を表していることも窺われた．具体的に言えば，Geo.はローマ的な詩として，Lucr. 的「心の平静」や Ecl. に於いて示される自然愛や敬神の心，さらには Hesiod.の労働観や正義の思想等を発展的に統一した詩と解される．このとき，初めに提起した問題 ——「農耕賛歌」と第３巻序歌（2.458-3.48）をスプラギスとみなす解釈の可能性 ——は一つの有力な根拠を得た事になるだろう．なぜなら，全巻の中心部を占めるこの箇所は構成上次のように分析しうるからである．まず ① 2.475-494では，Ecl.の詩人としてのVerg.

の立場がエピクロス派の詩人 Lucr.のそれと対置される．一方 ② 「農耕賛歌」はこの対置を含み込みながら，今触れた Geo. の詩人としての理想を語る箇所である．続く ③ 第3巻序歌で Verg.は Geo. の独創性を改めて表明するとともに，未来の叙事詩を約束している． つまりここに於いて，Verg.は ① 過去に於いて Ecl.を ② 今，Geo. を，そして ③ 未来に於いて叙事詩を歌う詩人としての自己成長の経緯を告げていることが明らかである[35]．また，はじめに触れたように Geo. ではその独創性の自負が3度にわたって表明されているが， それらの表現が Hesiod. や Lucr. の作品， さらには Ecl.を想起させる工夫を持つ理由も，以上の考察に於いて具体的に検討したことになると思われる．

注

(1) 例えば， 内田次信，ヘシオドス，カリマコス，ウェルギリウス ── 創作理念の系譜 ──，『西洋古典論集』3，1987， 京都大学西洋古典研究会 28 参照．

(2) 「森の歌」としての Ecl. の解釈については， 小川正広，ウェルギリウスにおける牧歌の革新 ── Bucolica 1 の冒頭の詩句をめぐって ──，『古典古代における伝統の継承と革新』，昭和 57年，57-81 参照．

(3) 「イタリア賛歌」（2.136-176）は Geo. のいわゆるディグレッションの一つに当たるが， 本稿に於いて Geo. の ディグレッションとしては次の１０箇所を考えることにする． 「ユピテルの意志」（1.118-159），「内乱」（1.463-514）， 「イタリア賛歌」（2.136-176）， 「春の賛歌」（2.315-345），「農耕賛歌」（2.458-542）， 「愛」（3.209-283），「リビア人，スキュティア人」（3.339-383），「ノリクムの疫病」（3.470-566），「コリュクス の老人」（4.116-148）， 「アリスタエウス 物語」（4.315-

558）.

（4） 第３巻序歌が構成上第１巻序歌と緊密に対応し，自己の詩作をアウグストゥスの偉業と対置していることについては，拙稿，ウェルギリウス『ゲオルギカ』——文明国家ローマに生きる人間の課題——，『西洋古典論集』5，1988，京都大学西洋古典研究会，56，注(46)参照.

（5） 内田次信，上掲論文，28ff. 参照.

（6） 4.559-566 の解釈については，大西英文，「ブーコリカ」から「ゲオールギカ」へ，『西洋古典学研究』28，1980，44ff. 参照.

（7） 2.475-494 には幾つかの Lucr.の表現上の借入が認められる他（例えば 2.478 と D.R.N. 5.751，2.479 と D.R.N. 6.577f.，2.482 と D.R.N. 5.699 の対応関係が挙げられる） 2.490-492 には D.R.N. 3.37f. のテーマの反映が明瞭に認められる.

（8） この解釈に立つとき，2.486: flumina amem siluasque inglorius と 3.8-9: ....temptanda uia est, qua me quoque possim / tollere humo uictorque uirum uolitare per ora の示すコントラストの意義もむりなく理解されるであろう．すなわち前者は牧歌詩人としての Verg.の立場を表現し後者は叙事詩人としての Verg. の意識を示していると考えられる

（9） Aen.におけるスプラギスの解釈については，岡道男，古代叙事詩の序歌——『アエネイス』について——，『西洋古典学研究』26，1978，18-22参照.

（10） クリングナーによればエピクロス哲学言及の意図は農夫の生活を最も崇高な哲学者の生活に結び付け，農耕生活賛美のテーマの品位を高めるためと解される． F.Klingner, Über das Lob des Landlebens in Virgils Georgica, Hermes 66, 1931, 159-189.

（11） cf. R.D.Williams, Virgil: The Eclogues and Georgics, New York 1979, ad Geo. 2.461f.

（12） Lucr. は D.R.N. 2.29-33 に於いて田園生活の安らぎを称えるものの，それはむしろエピクロス哲学の勧めるつつましい生活の喜びの一例であ

り田園生活そのものが Lucr.にとって本質的に重要な意味を持つのではない点に注意すべきである. cf. G.B.Miles, Virgil's Georgics, Berkeley 1980, 159.

(13) cf. D.R.N. 4.580-594. すなわち Lucr. によれば田園世界に神が住むというのは一種の迷信に過ぎない.

(14) 1.338 が Hesiod.的敬神のモチーフを反映することも事実であろう. cf. Erga 706.

(15) signum は 第1巻後半 に頻出する (1.229, 239, 257, 351, 354, 394, 439, 463, 471). ここで注目すべきは signum は単に悪天候を告げる印であるばかりか人間社会の悪を気付かせる点である (1.439, 471). 1.469-488 で描かれる自然界の混乱が 1.489f. で語られるローマの内乱 (人間社会の混乱) を反映する現象であるという認識 (cf. 1.463: sol tibi signa dabit) は Lucr.には見られない Geo.独自の自然観を示す一例である.

(16) 廣川 洋一, 『ヘシオドス研究 序説』, 未来社, 1975, 58ff., 190ff.参照.

(17) cf. P.A.Johnston, Vergil's Agricultural Golden Age, Leiden 1980, 15-22, 47-61.

(18) ジョンストンはプロメテウスの人間に対する好意を 1.118ff. で示されるユピテルのそれと比較している. Johnston, op.cit., 71.

(19) cf. Miles, op.cit., 64-65.

(20) パトナムは 1.7-8: Liber et alma Ceres, uestro si munera tellus / Chaoniam pingui glandem mutauit arista, に於いてギリシアからローマにつながる文明の発展の一例が示唆されている事を指摘する. M.C.J. Putnam, Virgil's Poem of the Earth, Princeton 1979, 19.

(21) cf. Williams, op.cit., ad Geo. 1.8.

(22) cf. Geo. 2.174: tibi res antiquae laudis et artis.

(23) cf. D.O.Ross, Virgil's Elements, Princeton 1987, 218ff.

(24) cf. D.R.N. 2.55-61.

(25) Erga 42-58 に於いて，a)「文明の発展」の象徴としての火の言及は 50, 55, 57 に見られる． b) プロメテウスの「知性の働き」を示す語は 48, 54 に，c)「ゼウスの怒り」を示す語は 47, 53 に認められる．また，d)「厳しい現実」を表す語は，42, 49, 56, 57, 58 に見られ，e)「労働」の必要性を示す語については，42-46 に見られる．

(26) cf. Miles, op.cit., 156.

(27) 2.534: rerum facta est pulcherrima Roma は「イタリア賛歌」のテーマを想起させる． 一方 2.535: septemque una sibi muro circumdedit arces は 表現上 2.172: imbellem auertis Romanis arcibus Indum と対応する．

(28) 「イタリア賛歌」(2.136-176) では人間の労働 (cf. 2.155: operumque laborem) の成果としての高度の文明社会が称えられている．例えば農耕や牧畜の発達 (2.143-150)， 都市や城塞，港や防波堤の建築 (2.155-164)， 優れた指導者 (2.169-172) 等の言及は国家の秩序の中で高度の文明が生かされていることを示す．

(29) 拙稿（上掲論文），40-43 参照．

(30) cf. Miles, op.cit., 148.

(31) cf. Ross, op.cit., 80-83. ロスは人間の労働が自然に対する「暴力」として示される点に注目している．

(32) cf. Miles, op.cit., 152.

(33) この「矛盾」 を指摘する者としては Putnam, op.cit., 143-144, Miles, op.cit., 164-165, Ross, op.cit., 140 等が挙げられる．

(34) cf. 2.472: patiens operum, 513: agricola incuruo terram dimouit aratro, 514: anni labor, 516: nec requies.

(35) Aeneis における詩人の自己成長の自負をめぐる解釈として， 岡，上掲論文，18-22.

（付記： 使用したテクストは R.A.B.Mynors(ed.), P.Vergili Maronis

Opera, O.C.T., 1983, C.Bailey(ed.), Lucreti De Rerum Natura, O.C.T., 1982, M.L.West, Hesiod: Works and Days, Oxford 1982) .